ペイ・ヒョンイル裵炯逸・배형일の追憶

稲賀繁美

あれは一九九七年か翌年あたりの北米アジア学会ＡＡＳの席だっただろうか。日本による韓国併合下の韓半島における考古学、といったパネルがプログラムに予告されており、興味もあって行ってみた。座長を務めるペイ・ヒョンイルという名前の女性は、まだ三十代後半の元気のよい、声のよく通る女性だった。硬質の切れの良い英語で、ずばずばと言いたいことを遠慮なく発言する気風の良さが、きわめて印象的だった。日本支配下の考古学をきびしく糾弾しつつも、東アジアを見渡して、そもそも考古学という学問が朝鮮半島の歴史を塗り替えた沿革を問い直し、韓国で支配的な国粋史観を批判する姿勢も鮮明だった、と記憶する。なにより新しい留学世代が、北米で市民権を得て堂々と発言を始めた、という印象がきわめて鮮烈だった。

ＡＡＳは売り手市場という雰囲気なので、パネル終了後は忙しないのだが、名刺を持って座長に接近すると、先方がいきなり、あなたの発表はスゴカッタなどと言ってきたので、驚いた。誤謬があったら申し訳ないが、記憶違いでなければ、ワシントンＤ・Ｃで当方が岡倉天心のインド経験を下敷きにその英文著書を読み直した発表の折だっただろうか。その場はソレデオシマイだったが、おそらくその後すぐ電子メイルで遣り取りが始まった、ような気がする。まだメイル以前の、ファックスの時代だったのかもしれないが。かくして筆者が一九九七年に日文研に勤務し始めて最初に招聘した客員教員（任期二〇〇〇年一一月～二〇〇一年六月末）

が、ペイ・ヒョンイルとなる。

日文研に現れた彼女は、最初コモン・ルームでこそ借りてきた猫状態だったが、所員会議（まだ研究部会議という名称だったか？）で自己紹介となると、俄然、本領を発揮した。イナガ・センセイというのがＡＡＳの発表のあとで近寄ってきて、老大家の大先生だと記憶していたのに、日文研に来てみたら、こんな若い先生で、ファカルティで一番年下（これは事実誤認）だなんて知らなかった、といった調子のアッケラカンとして陰りない発言が口をついて出てくる。気分が乗ってくると声がとたんに裏返るのも彼女の特徴で、屈託のない度胸みたいなものが仄見えた。彼女を中心にして植民地期の考古学・美術史学とその周辺という主旨でミニ・シンポを開き、その成果は『日本研究』で準特集号にまとめる機会も得た。周囲の同僚の記憶では、当時彼女は博士論文を刊行する以前だったが、丁々発止たる勢いだった。

その彼女から、ロスアンジェルスのカウンティ美術館で韓国近代の美術史・考古学に関する国際学会が二〇〇一年春にあるので、来ないかと尋ねられたのが、二〇〇〇年のことではなかったか。このような企画は史上初めてだったはずで、北米合衆国西海岸での韓国コミュニティの発展もその背景にあったようだ。これも詳しい記憶は朧なのだが、いくつか強烈な印象が残る。まずなによりも、美術館講堂での彼女の発表は大変な反響を呼んだ。喝采ではない、その真逆で、韓国からのデレゲイションが完全に凍り付いた。韓国では当時国是だった、古代韓国考古学が韓国の民族的自覚の古代以来連綿たる持続を証明するものである、とする前提に対して全否定に等しい発言を堂々と展開したからだ。その場での質疑応答も激烈だったが、イルパイ（彼女の自称のひとつ）が平然として受け答えして、胸を張って壇を降りる姿には、心底、舌を巻いた。なにしろ祖国から渡来した権威筋を含め、総スカンである。度胸があるの

か、それとも「我感ぜず」なのか。

いうまでもないが、韓国主流の考古学にケチをつけるとなれば、その創設者たる世代の学者の業績を否定することになる。彼らが「光復」後の韓国考古学の礎となり、会場に衆参したのはそのお嬢様方（というと誰だか判明してしまうが）とそのお弟子筋の権威者ばかりである。儒教社会・韓国では到底許されない事態がその場に現出していた。ペイ・ヒョンイル自身は、当時北米で流行だった、民族鼓吹の国粋主義に対する批判を具現し、どうみてもイデオロギー偏向だった故国の考古学界の傾向に物申す、という姿勢だったのだろう。だが韓国勢からの非国民呼ばわりに、これはタイヘンだ、との危惧感は蔽いがたい。当方も知己の、件の founding father のお嬢様方とお弟子筋の宴席にも呼ばれたが、あの女はなんだ、ケシカランという糾弾の席に据えられて、反論もできず、なるほどと聞き入るばかりだった。

同じ会合では、ＵＣＬＡ構内の美術館で夕刻からの歓迎会もあったと記憶する。これまた場所を混同しているかもしれないが、どうしたわけか美術館の出口でイルパイとオシャベリを始めたら止まらなくなり、ふと気づくと周囲には誰もいない。もう送迎バスもあるまいと二人でホテルに戻ってみると、集合時間を一時間も過ぎているのに、お前たちが来ないのでバスが出せなかったと、同僚たちから非難轟轟。我々はそんなことにはまったく気づかないままだった。この時だったか、別の時だったか。どうしたわけだか関空行きの同じ飛行機に乗ることになり、例の調子でオシャベリを始めたら止まらない。太平洋を越える間、機内で休みなしの放談議論が始まり、とうとう我々の左に座っていた日本人の女性から、あまりにウルサイので静かにしてください、と文句を言われて、ようやくシュンとしたことがあった。とにかく彼女と学問談義を始めると、際限がない。正直いって英語であれだけ互いに遠慮会釈なく冗談をいっ

て冷やかしたり、学問の現状に慷慨して鬱憤を晴らしたりできる相手は、ほかになかった。陰惨な不平不満も、彼女と話していると、どうしたわけか、すべてが快活な冗談の話題へと転じてしまうのである。この折は、なんと関西空港に到着してもまだ決着がつかず、空港ビルのレストランで延々とオシャベリを続けた記憶がある。意見に同意すると間髪いれず、yes, yes, yes と連呼する朗らかな声が、今も耳朶に残っている。あれは何の機会だったのだろうか。

こんな思い出を掘り出していたのでは、際限がない。ロスアンジェルスからサンタ・バーバラまでご主人アレックス・ショゼさんの運転で送って頂いたのが、いつだったのか。このときも快晴の西海岸の高速道路を飛ばす間、やたらと学問談義で盛り上がっていた。運転のダンナ様のお父上かご親族はフィリピンで著名な作家だとのことで、彼が小説を書くために生活上の仔細な出来事をくまなく観察してノートにしている様など、それは生き生きと語ってくれた。そんな会話の最中だっただろうか、談たまたま当方の父が末期の癌で、という話題に及ぶと、いつもの快活さは寸分も変わらぬまま、癌治療についてひどく詳しい専門的知見を彼女が披歴し始めたのには驚いた。親族の事として語ったはずだが、実のところそれは、自分の体験だった。

彼女の博士論文を基礎にした *Constructing "Korean" Origins, A Critical Review of Archaeology, Historiography, and Racial Myth in Korean State-Formation Theories*, Harvard-Hallym, 2000 は北米では相当の反響を呼んだが、半島では黙殺された、という。その後彼女は、韓半島や楽浪郡の古代考古学や発掘からはやや遠のき、植民地時代の学知と観光との関係について、先駆的な業績をあげはじめた。後から考えれば、これには日文研滞在期に接した植民地資料、絵葉書などに纏わる関心が母体となったのだろう。東日本大震災直後のホノルルのＡＡＳでも久闊を叙し、その後彼女が日本に招かれる度に、何度となく東京で会い、あいかわらず切れ味鋭い発表

に喝采し、京都では家内ともども楽しい宴席を設けることもあった。発表は英語が多かったが、質疑応答となると、憶することなく日本語で対応した。自己流の無手勝流日本語だが文意は明快。公の席での発言でも遠慮など見せない度胸が爽快だった。快活で健康の見本という印象は、最期の出会いとなった昨年も、およそ変わらなかった。例によってあまりに話が弾んだせいか、それとも、当方が、身の丈にあわない副所長など拝命していて、あまりに疲弊していたためか、内容はトンと記憶にない。

二〇一八年五月下旬、同僚の山田奨治さんからメイルが回送されてきた。読むと、末期の癌であと何日と生命がない、追悼記事の執筆をイナガに依頼してくれ、との携帯電話からの伝言だった。急いで返事を送って勇気づけたが、彼女がそれを読めたか否かは、ついに分からない。数日後、これもハーヴァード時代に親しい友人だった考古学者の本郷一美さんから、北米経由の訃報が届いた。共通の知己でもある尹相仁には、数日前にこちらから急を知らせておいたのだが、折り返し韓国での報道や追悼記事を伝えてきた。民族主義考古学の批判者として先駆的業績を残した故人について、故国での評価は今から変貌を遂げてゆくのではあるまいか。異境の北米で地歩を築き、学生たちからの人気も博した最良の友に、惜別の讃辞を贈りたい。

＊＊＊

サンタ・バーバラで教鞭をとっていた旧友のペイ・ヒョンイル裵炯逸・배형일が二〇一八年五月二八日に死去した。享年六十歳。以前煩った癌が再発したものの、五月までは元気に教鞭をとっていた。だがそれが急激に悪化したとのこと。あの元気と楽天性の塊が、もうこの世には居ない。韓国でいち早く長文の追悼記事を『韓国日報』に掲載した檀国大学校のシム・ジフ

ンが、敬愛する故人にこう呼びかけていた。「ヒョンイル姉さん、さようなら！」と。*

*記事は尹相仁よりの提供。朴美貞さんから即刻に翻訳を頂戴した。記して謝意を表する。なお彼女の姓は韓国では少数だが、すぐそれと分かる血筋。発音は「ベ」に近いが、北米ではPaiを使い、日本では「ペイ」で良いといっていたので、ここではその発音を用いる。

（国際日本文化研究センター教授）